

# 武家名目抄稿

軍陣部七二  
十三

四 五 六	一 七 〇	二 五 二 〇 六	和 書 門
冊	架	函	類

庫	文	閣	内	
五 三 函	四	二 五 二 〇 六	和	書
一 四 架	六	六	類	

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457(431)
函號	153 275



武家名目抄稿第十三冊

軍陣部七之一目錄

籠城

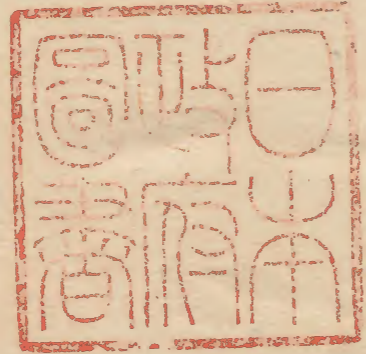
柵ノ振

狹間配

手立

手分

手配



手當  
 勢賦  
 配立  
 人数組  
 人数分  
 人数立  
 武者ウツカセ  
 働定  
 馬廻  
 馬ノ懸引  
 場ナラシ  
 山取  
 陣城ヲ構  
 印掛ヲ構  
 木楯ヲ構  
 奇変ヲ構



定ノ當ヲ作

遠卷

遠机卷

二重卷

遠持

惣責

惣象

惣懸

平掛

柔掛

車掛

仕寄

寄口

縹寄

逆寄

付入

武家名目抄稿第十三册

軍陳部七之一

籠城

後愚昧記云貞治二年九月九日乙亥傳聞

此間自関東危脚至来台衛督基氏与宇津

宮一旗号合我与方各十万余人付死子宇

津宮引退籠城了云々

新撰信長記云々々は城中守替り云々

押家町を焼拂ひ二九迄責當多一城中  
のとの女多を先途と改き二三ヶ月も罷  
掃し多き古何方より又統體も亦希北  
へ何を頼ふふくゆきとく後行者も多  
かりりり

氏郷記云木造左衛門佐十月下旬すくつ新  
城よりとふれ在伊勢与木氏郷乃武切に  
て平均活りし一ハ行ハ輕叶思ふれり

新田由良家傳記云

秀者公由良長尾  
老母ハ送状

由良也

尾兄弟子四ハ天下ハ味意を交ふ由子ハ先  
年小田原ハ橋立居城ハ所愈々木源旨雖中  
愈後母覚悟ハハ城を去拍ハ京都ハ味而中  
より例先成次第ハ可仕ハ旨ハ仰出ハハ付  
而ふ方子旨小田原ハ城ハ在源ハ後雖罷  
城ハ者ハ執事吳蒙ハ奈女知ハハ下度  
ハ思ハハハ木家康ハ

中国治礼記云陶は若山子用害をかま  
家城致ししと云振を我入山口より討

りしりハ龍城あり。魚起用を許り

精有依田軍記云 羽東秀吉の指  
麾一ノ下 信長卿秀吉

一使者ハ心々中ノは某瘧病治すは難

政一長也ハきま々ハ 略 中国場一歩々戦い味方

城 ハ 引籠士卒を休免々防戦かふる十

夜二十夜ハハハハハ然ハ之小城を父ハ時

より大城子及び龍城乃後能て今出向

中吾城を我後ハ申すてハと案内し出付也

ハ水守ハ水出始ハ程々そ水別不ハ方

より皆々者行を希ハ水出者不審ハ終ハ

三小城卯ハ物又ハの謀使を耐立其ハ物を窺

甲乱記云 信忠遣言  
遠城中状 勝頼ハ昨日孤防引退

ハ聖為始ハ山田屋裏者共討く可也ハ由

中東然ハは別ハ憑雅行止ハ可籠城ハ早

速退仕於抽忠節と責任全之と  
義光物語云義光公大軍を率し天幕へ  
押寄責給ふとついで城中より究竟の兵  
數多龍城しある事ふれ多不速責給し  
ゆり多龍城あり引退き向城をこぼし  
數目を送る龍城  
雜兵物語云五藏居くくくは吐を少中山  
や川や理合戦の生吐し斗吹出し

つ先ゆく若敵乃城を悉くおされく時は  
龍城をしおめされ

柵ヲ振

小富京憲家譜云京憲中より彼地へ出着  
日言可然し平上侍一人小山依二依三  
依り土身のぬくに重細き杭細竹成共柵を  
振鉄炮をけ揃へ暮六つ時より明けいつとく  
七時の留候おせれつと出中留候



狭間配

今津陣物語云城中豊野登坂は政宗の兵  
を不知るに被<sup>被</sup>取急俄の事なるとは大小  
愕防義早飛脚を以て急討一往進し橋  
裏杖<sup>杖</sup>留<sup>留</sup>配<sup>配</sup>し<sup>し</sup>く砲急所<sup>急所</sup>指出<sup>指出</sup>し<sup>し</sup>久<sup>久</sup>此  
三刀庵<sup>三刀庵</sup>孝和<sup>孝和</sup>記<sup>記</sup>云<sup>云</sup>孝和<sup>孝和</sup>嘗て<sup>嘗て</sup>中<sup>中</sup>有<sup>有</sup>は<sup>は</sup>狭<sup>狭</sup>間<sup>間</sup>  
配<sup>配</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>打<sup>打</sup>口<sup>口</sup>を<sup>を</sup>空<sup>空</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>事<sup>事</sup>あり<sup>あり</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>は  
し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>人<sup>人</sup>数<sup>数</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>力<sup>力</sup>な<sup>な</sup>し

<sup>五</sup>武蔵叢話云大崎玄蕃隊長行を関ヶ原の  
時名福島に則冒津田侍中が繁元小室添  
尾が清須城の留守を致さ石田治部運心し正  
則侍中秀頼と此一家を此は其城し此方  
乃人数入然しと謀る侍中侍中名を至  
極也人数入きんと約束を致さ玄蕃同く  
侍中を大り此の城を渡す事首々成  
らんとく城乃要害<sup>弥</sup>後<sup>後</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>矢<sup>矢</sup>間<sup>間</sup>配<sup>配</sup>里<sup>里</sup>

年立

太平記云 在菟野 義興義治魚鱗子連く西口  
をたすつゝ敵乃中を破らんといはれぬふ事小  
仁亦越後守義長を此夜又々敵の馬乃立  
松軍立尋常乃武志子ありす小勢なりとて  
悔りく中を破らるゝ一不ふつをたす  
敵免るゝ急合を 急 前後に常々目を付けて

大物と覺しき敵 何 は組く落し〜頭我  
右と葉武志か〜は村落せ敵は力を以  
させく法方 少 も不漂嶮勢に多勢不勝  
やと香細子自。立を成敗し〜一可も勢を  
持るふもたる  
大友興廢記云 あり 先陣は多川み松子  
陣をたす立花忠房高城の自たるをた  
ありす成り

甲陽軍鑑末書云小田原危ハ生ル立リ有リ  
武田將をくいとむ。事今し

手合

吾妻鏡云元暦元年三月十七日丙午坂垣

三郎兼信飛脚去夜到來鎌倉今日判官代

知通披露彼使者口状其趣應貴命為追討

平家赴西海去八日出也而適列御門葉奉

一方追討使可為本懐之處實平乍相具此

手称蒙各別仰於事不加所談刹云西海雜

務云軍士手今不交兼信元合入獨可相計之

由類結構云々

太平記云山門將軍左了以高上松の人

東ちし合合略中合戦の評定あり

月二日四方此合を定て追手搦手五十了

駈北勢を山門へ差向らし

又云益言昨日合戦小友軍が勝人とす

一な二國との勢馳奔りて難義ある事と  
こそありしゆりて不可好とて与極断  
しつゝ此方の急分をせりし九月一日  
の城へ登向す

又云 赤坂城 軍條 赤坂城 軍條 案にお違

いやく此城を為體一日二日こゝに居まり  
くろそ暫陣ををえりて後不接一合し  
合戦を致さしり 攻口をみしり 馬の

鞍をゆし物具を脱く皆帷幕乃中をを休  
居りしり

又云 赤坂 義貞朝臣も正成を大敵我見

ては欺き小敵我えくハ侮らざる世祖光武  
心根我写し得る出而者なりとはみし  
機を失いたる事色なりし先和田は崎の

小坂原に打出し同し急分を仕給ひし

又云 四月三日 合戦条 与六波羅を急くの合戦あり

勝く兵皆氣絶奔ぐる上其勢を算ぐる小  
二三万弱小余りある。百已は近付んと告ぐ此  
中作兵の氣色もなし六条河原より略す  
聞り自分をもせらむと打

愚耳旧聴記云 小富元近忠  
牙道牙条 元近洞をなすし

あり此事此口惜さ小姓君松のほる打  
志とてす川をし 此や謀ふ我討死すふ  
らはきぬやの名を頼してう 命を ~~命~~ 命

終ふべきたけつと物君松此は初末を尋ね  
て着むるくもあつて終つて其時身のあぢ  
をきむむし 中 畧いさくら小舟子とて各  
自分殺したりなる

又云 大光寺初  
度合戦条 十四日よは堀越小止滞り方

の自分殺す可場... 一差向られ時十  
五日未明小堀越を以て陣桶川の番所を煮り  
破り並小飯田其一岐着陣定めて兼る乃時

分此出とくは人数をそ差向らる

十三、十四  
関八州古戦録云 由良国繁 長尾颯 龍城の

人数を駆促し根岸 三 流を執事とく着到り

記とせり、小騎馬七百三十騎、雑兵三百余人

と又へたり、ちきはささば、分し、指口を

定めよとて、太田口を渡れ、尾門に繁治横瀬

勘九郎を大將とく、宗徳の士十六人 中 坂下此

平地にお侍とく、石 カトシアナ 坎穿を設く、待急堂

里 カトシアナ

甲陽軍鑑末書云、大軍は 必 勢揃の場を定

む、但二万五千以上の事也 中 分組自配

分侍立口侍 カトシアナ

家忠日記抄云、天正八年、三月朔日、逢坂田中

分、分とて、番侍候 カトシアナ

手配 カトシアナ

太平記云 鳥津家本摩 那城官 我条 西五乃 敵根 津国 摩

那城小取とく兵庫漢川小関代居へた至  
とぞ一はあ六波羅大に騒いそ依も才  
の判友時信常陸前司時朝に十八ヶ所幕居  
本左系の人七十三人並圍城ち虎徒五百余人  
彼と是れ敵合七千八百余騎を摩那城へ着  
下さる然敵は只楚の陳涉、亡秦の弊も衆  
しく山東小起りしり出とし城小義小あ、  
り落り死する心えよもあらしとあも皆悔

て山の案内も向えす皆此の配をも為す我  
先小とそあがりある城小楯籠所の皆古記  
また也戦小馴とく時此虧盈を見る事を均  
たるとあをそりりとは云々

播州佐用軍記云 上月城を捕圍討 政範、諸

大羽を和く中々るは不思議の誤り響き  
福系々博代及る山彦不然、宇長多の足延  
勢と見て小いく力を合々す人、事合此事

みくねんんと申る。政範を始り徳大が河れ  
も此像尤有りと同じ。左らはお虫毎誰波と  
自配評し多敷

甲陽軍鑑末書云小笠原は去年江州姉川  
に於ての自柄我鼻の先へおし信玄馬の  
向ひたるも本意たてをすると思へたる  
必味方少しも怪象あきやくに敵を討取に  
も播磨す推詰をさへく見まよと云信付内

若畏くはと決意を申程く武略を以く敵の年  
へさる様小備を出し手配りし二の軍進  
持物取を多討歩者と勝利の得を云合  
免智略をも川く敵を多く引出し武略を能し  
く偽我敵ふ又と平復攻合を初る

午當

天正記云東言も他池田紀伊守祿あり  
此自あてとするなり



勢賦

應仁記云勝元ハ一色引退ク上ハ兼テ内  
談セシ如ク公方ヲ可致警固トテ頓而一  
門他家ノ人々召集評定シテ勢賦ヲシ玉  
ニケル

配立

左平記云 三利友打越 中者十席大江山麓  
大江山条  
あり道よりするをよみお奉て奴可四席を

時のきく云々は心ゆぬる向が大子の合裁  
は火を散しし今朝の辰刻と里始りにれハ  
搦手各芝居の長海生とくさした体ぬ名越五  
江討張人と穿へるとは丹波路をさし馬を  
早の給ふは此人ぬ何振取人を挿給ふと覚  
ゆりそ界奴可四席、しくも室ひたり我と  
事の神怪しくは存ありと量し又何ある配  
立、ありゆりんと免角葉しるる言ふ早今日

乃合戦り巡水為る事ニ其安。う。祿。

人数組

甲陽軍鑑云弓矢ハ皆魔法少く此取  
軍配を法用ひたりとは勝負の儀胡亂小  
ま坐外旗色を法覺し。中氣烟氣を  
見已希す。急死。これ花やうそる。を  
了人数組陣取の成極。皆過痴。有。思。右  
取。云。

人数分

紀州祭向記云今年天正十三年三月廿一  
日。新。由。日。成。陣。觸。彼。道。筋。海。山。力  
峻。難。舟。了。着。揚。了。立。守。某。内。者。を。以。て。款  
又。究。め。成。畫。圖。先。自。之。大。將。令。知。之。人。数。分。  
二。心。脚。院。不。書。立。定。筋。次。者。也。浦。山。与。自。了。侍。二  
十三。修。也。  
人数立

大友奥磨記云 久留米 今我条 豊後勢は山小川の

あり勝向用を挙着実檢をとけくいくさは

たそりぬ宛古人数立乃打首字良山の

在註より法師武者請し里せい七百餘

人加勢としくあり事

武者ツカイ

今伊陣物語云政宗先多此大羽溪田治部右衛

入は若年所と事去去ツカヒは石田豊

前守り水中付事、系小濱田治部、士草小

先立く一書小三の丸へ改入事新

働定

小畠宗憲家譜云服五右衛門下知仕敵名色者

味方若原謙一関味方関を能と中川原関を

揚子上高宗急り押崩し中川下立徳云

子ゆへ敵を敵り、能を尼に此中時敵

頼地共立外宗憲一入進云

馬廻

東邊基業云神君丸と思ふ事新不也  
其意と下知しる事奉多政信と内  
其門下は知ある人数を之より  
今ふ是る徳川家此合馬此小旗之  
十人の旗類始り井伊万代直政  
此旗未は此小姓尻甲尻切  
只り餘り事人今有又若業  
其付

世は旗は寛政大文有り  
押高

又之今川の城代或田上野介山田新左衛門

書状を承くふ此程知し城を此

今諸士は日の出を待て退くと申

其ヶ振の所々暗夜幸也浅井を棄内志

其明を指し免前語を進せり此打首

降る人途り迷ひるに神君下知し

其い古老の語りしは敵國を此り

あり騎字は十町斗先小兵を高く家兵に松  
明を拵事なく六之町、松明を目當ふま白し  
多級<sup>破</sup>ありぬまは松明を振一しと定り  
と馬<sup>〇</sup>只り子は士卒二十人斗を随一切所  
て一人を抽し置証り来る士卒子ふれ  
をこりせ難なり池鯉鮒までお給ふ

馬ノ懸引

太平記云 新田羊負居 越前府埴條 高し暫も三斗の騎

防く暫も三斗 余騎大物は何とも名残惜む  
源氏一流の棟梁也志るも馬の急川たす  
死在所たるは歎味方六斗余騎有後居者  
追川區一つ入れと守時斗を我ら

場ナラシ

叔井日記云 四國傳前 丑 者既同系 毛利の大將子其の楚  
忽、外軍勢を以今小中、兼白忽説を以天  
下をさせ、其々たりは存ては場<sup>〇</sup>ふラシ

の内子結句、逆高しり不仕

山取

東<sup>立</sup>進基業云直江山城守松永常陸守

存<sup>。</sup>く侍をたふより義光も亦<sup>陸</sup>を張て對

せし

水野勝成記云知月の九日相とりてぬ孫

七郎山<sup>。</sup>を<sup>。</sup>つ<sup>。</sup>く<sup>。</sup>侍を立死出

陣城ノ構

甲<sup>七</sup>陽軍鑑云村上内の侍大物ふよりぬの

下<sup>。</sup>か<sup>。</sup>かん<sup>。</sup>ト<sup>。</sup>三人陣城を<sup>。</sup>か<sup>。</sup>ま<sup>。</sup>く<sup>。</sup>屍を<sup>。</sup>一<sup>。</sup>枚

垣家中の侍六十餘歩者一人もそくす大物

又を<sup>。</sup>ふ<sup>。</sup>し<sup>。</sup>ぬ<sup>。</sup>何<sup>。</sup>も<sup>。</sup>敵陣<sup>。</sup>近<sup>。</sup>く<sup>。</sup>集<sup>。</sup>り<sup>。</sup>又<sup>。</sup>く<sup>。</sup>物<sup>。</sup>を

つ<sup>。</sup>し<sup>。</sup>と<sup>。</sup>下<sup>。</sup>知<sup>。</sup>せ<sup>。</sup>し<sup>。</sup>る<sup>。</sup>

印掛ノ構

細井日記云 水<sup>上</sup>宗<sup>貞</sup> 合<sup>義</sup>系<sup>系</sup> 今日調伏の摘けし

免<sup>。</sup>る<sup>。</sup>小<sup>。</sup>林<sup>。</sup>修<sup>。</sup>理<sup>。</sup>進<sup>。</sup>の<sup>。</sup>作<sup>。</sup>せ<sup>。</sup>付<sup>。</sup>の<sup>。</sup>氏<sup>。</sup>又<sup>。</sup>へ<sup>。</sup>う<sup>。</sup>日<sup>。</sup>の<sup>。</sup>分

元印改めの規式も及へくはとて固り構たかは  
印掛を構へらとくは之候構の法うてはけ  
なま

木楯ヲ構

長門本平家物語云 能て了ぬ 彦守名条 源氏の如くは  
は判官とに岡本殿 經春と伊勢三浦義盛  
はうりそ平家さへ免て今觀ようちり  
せんともうへん一昨日渡きより石波あへ

多し三時うへんしりて大隈より申しきく又  
なやうとあしき今日終りたしういしきく  
あともうへんみふつとふしきくさるも  
のうせたりありあはれ三人をうり いん 敬  
く今よちちんまとてさるあまき遠見  
し川宿所は木楯をのみくく敵きくは  
射おとさんと窺たり

奇變ヲ構

各 粗井日記云 桂川合 敵の大將古今頼朝の取

をすくくと甲けて粟田口山科大津の百を

陣をとり伏隠しを作り守を捕へ甲け

追信山致れりといやツラカ謀成思とく敵

中と口関中へく候

定ノ當ヲ作

粗井日記云 信長公 惣從東口乱入ハ 上西屋形出張条 津目波多野

須粗井等之城を去まよ押へく及名の定

乃當を作りく東口能勢口一面を取らて

西中へ打刀人とは巧ててけ

遠巻

江濃記云依り亦兼復又子は津井、濃州へ出

張し、高差と合戦す此時人数を少し依り

山林葉取其後山谷へ押寄法井下野守り

腹切らせ四ノ郡を切さく、一、手束の女意を

達せんと永原新尾門頻りにさめ申す旨



同筆此三月廿二日寅の刻一万四千の勢を率  
し佐和山へ馳向ひ所居を焼拂ひ遠き山志ころ  
あり

新搦信長記云三月廿二日寅の刻一万四千の  
勢を率し佐和山の城へ押寄せ所居を焼拂ひ  
遠き山志ころあり城中の名目同章隆き急  
き後卷の者といふ谷へ毎三云は別別同給  
いふ此小人数みく後卷の叶くしとやぢん

角やあしんと案し始しり所詮敵あり使そくそ  
義景代新頼の如勢を諸ありとく津井福壽  
庵を以遣

清正記云天正九年六月廿五日因幡國鳥取城  
攻の刻秀吉は彼城を見向ひ多し地の利よき  
城ありたやすくせ免くつす多きやうなし遠  
巻りすしかき免色の仰を又く集まると特復  
其意をあつを右て命けしと加さし伝ふくあ

ある

播磨佐田軍記云秀吉宛の手紙  
甚多合致直家先傳前

作の軍勢を僅儀しして金第宇敷多掃部助廣

雄代大將して其勢三千余ありて遺す中

上月の城より西南に當り秋里と本云しつゝ之の南山

の尾崎ふつり兵振ると其の安あり上月の城

向一謀士此物見仕遣し悉く今日昔とは平

場へお入りんと休ん張るあり件の物又此

く是物り申さるは上月城亦北东南にあり

遠遠巻する事稲庭竹葦にことし

本井日記云物井矢織  
明退糸明智麩川長岡等は随

分と信長内よりの鼻此等男世なる氏

好教業う日比の火勇の自あふ討敵を必仕

を此の能と掛拔く遠遠巻り備く近付ふ中

を追話め勝負しして倍比真也未練也切ふ

初掛しるり才間ぬ都下能はひしは氏好

後中...は免角の川を...彼等の付色を  
いへる...討取...陣地八田の方へ...  
一 挙ら...  
...

相原自体自派之秀忠...山陽道進軍の御  
甲府拓浅野弾正少弼供奉...相原為魁兵大  
久保相模守本多佐渡守酒井右兵衛六丈森石  
通大丈志田伊豆守仙石幹前守石川玄蕃以日  
根取統後守等率三万八千余騎出上野襲志田

忠房守上田の博略中久保牧野、高野等粉者  
与相割之引入軍勢、其後遠卷に...  
遠執卷

遠執卷

郭撫信長記云信長に數千騎を引具し山倉  
表一出張者...城の柵を破...  
瓶巻に...臨い...城の中...人数をも不出  
静り切...居...一...日...子...為...  
指事...

二重卷

雑<sup>十九</sup>兵物語云此夜乃陣の侍供小ほ杖箱をゆり  
まじちあさつて高の勢こまを振りゆく着切つ  
と<sup>中</sup>略服<sup>三</sup>はあまやまないで片身付とあて柄  
のす尺うま一束さくきて柄の細いさる片身に  
はぬといよりはま<sup>一</sup>く小糸を引ほどいて中心  
さけに柄をむつはめ敷のめさみふすいうつ  
の釣くもあんにいじえ<sup>一</sup>引通<sup>一</sup>二重<sup>二</sup>巻<sup>三</sup>あも

巻一いとおとふ

遠持

<sup>三</sup>粗井日記云天王の城の<sup>一</sup>能瀬大寺<sup>二</sup>の助城代と  
しと居り取去城ともあ<sup>一</sup>在番北<sup>二</sup>虎<sup>三</sup>の寺と  
瀬<sup>四</sup>の古代より北<sup>一</sup>持子<sup>二</sup>の此虎<sup>三</sup>の寺と  
案<sup>四</sup>りお遠<sup>一</sup>と<sup>二</sup>遠持<sup>三</sup>と<sup>四</sup>居りを却て粗井兵  
庫<sup>五</sup>を始免<sup>六</sup>あ<sup>七</sup>くぬ大<sup>八</sup>勇<sup>九</sup>の旗<sup>十</sup>流<sup>十一</sup>虎<sup>十二</sup>口<sup>十三</sup>を開いて  
討<sup>十四</sup>て出<sup>十五</sup>

惣責

矢島十二郎記云文禄元年七月廿五日由理十一  
郎お談し上矢嶋五郎夜免角は討潰し一可中ハ  
八月申上母のよし風了す登りの後は如何從  
義光とより遠不審ありは逃分申分け可中ハ  
若中分と並れり十一郎記に義光との  
一は中より外の外すりと十一郎の考とも惣責  
と写れしは五郎及老臣方は意えをハ中は

家中も心替り一と三歩一は信ともを減り十一  
郎一向の義を難勝早く一宗より登り上洛一の逃  
をより中ハ一にさり一は困る事と荒倉一  
城一銀幕一あり大勢を何心あり付掛を成  
候

三好記云天文十九年正月十一日筑前守長慶  
富相城へ出張あり伊丹城惣責あり一と信の  
催候あり何とに双方より和談の事を遊佐河田

守備いふれを互互の合点ありて  
野田福島合戦記云信長は天王寺より中島  
大湯森へ陣替あり天神の拜殿も合所も今度  
院市は森北中に陣取先陣を野田の世海老  
江堤に田中に陣取をわけしを八日河  
口より向む城方敵初めあり同九日より野田福島  
方城をう川女を奪をとりて悉く埋えらるる同  
十日に右より及の城方中津川に舟橋を築

らきより一五日の中に野田福島へ押  
寄也。責りす。と土色見をばす  
とせ。攻。攻。攻。

惣象

毛利孝記云秀吉は陣取乃東北方海  
の傍より陰謀の陣場を渡せりし時  
對面ありて係しは数十日城を攻  
たせ候へども今に弱らす旨也。業り

不<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>と思<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>  
か<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>

惣懸

甲陽軍鑑之懸る<sup>一</sup>一<sup>レ</sup>際大弓を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>  
合治部を討殺す中<sup>レ</sup>左平次合見<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>  
骸を引<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
人<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>士<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>討<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
弓<sup>レ</sup>箭<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>駒<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>空<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>丸

つせり合中<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>玄<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>  
者<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>旗<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>摸<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>波<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>  
揚<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>させ<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>玄<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>  
又<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>玄<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>  
て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>旗<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>摸<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>  
を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>させ<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>  
は<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

平懸

東遷基業云 植富山城を以て向く 平今  
小幡より出づる 侍の事を待てる 勢あり  
は覺悟あらざると中もあらず 小幡より  
四侍五侍が来る 其れ海に出る 去る 去  
の去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る  
町斗とも又し せし ぬみ を 去る 去る 去る 地

是のころ 平より あり 去る 去る 去る

柔掛

叔井日記云

氷上宗自思井 表合義系

此陣は別し

名ねきの 望免ら 去る 去る 去る 去る 去る  
人と誓願し 去る 進まれ ぬは 去る 去る 去る 去る  
しく 柔ら 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る  
乃 勢は 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る  
さ 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る 去る



古う傳し其を立ち終えしてけり  
車掛

甲陽軍鑑末書云信守儀肝要也其得備

早く立味方二三日五の自近早はく車

掛おも是をとい川くすも也

又云信長公の作は謙信不との忠々音よ

川をふへ敷を哨の程にくむるく

引取急起り返換る如何と問答浦那中

謙信傳を傳けりて立ちりくくさる

川の方へをもむりいと中あぐる信玄公守

し石そきは車急とつふ軍法なり謙信は

今日を浪りにすと見えたりされは傳を

立ちぬし終ふるり

松隣夜話云信玄ノ物見浦野ト云老功ノ

者馳廻り見テ飯り信玄へ謙信ノ陣ハ頓

テ是ニ候但人数既ニ起り旗本ノ一組味

方腕カ

備ヲ中ニ置テ押廻々々カイ川ノ方ニ  
赴ク此見候申信玄諸將手ニ逢夕  
ト覺ハ又ハ車掛リトテ遠近ニ依リテ幾  
度目ニ旗本ト旗本ト巡リ合ト云次第ア  
リ

仕寄

信長記云

輝元取圍播州上月城條

龍川惟任惟住荒木

筒井等裁始々々上月表裁引松書寫山

ましお大に翌日神吉城へ押寄せ昂時  
町を破りえ、城り焚去るに  
日小改落さるべりしを城中より銃炮  
自たき多し丸は自負死人数多射あさ  
る程り信忠如加程乃城よりよき者  
討ちん事不可然仕寄を付樓樓を上げ金不  
り亦に回せしむ及ぶ志しとく席口  
を付々させ給い事とは不可然と行た

はせんろふ以下乃攻具多あり是を支  
なす事きいしりりル事

大友具廢祀云 朝日嶽之 城落去糸 今之軍は惟定

の軍法は任すつと軍卒志あり大友  
口小形と偽を立しよりを付けて川を軍

有

又云 新造 城申より多勢を出してもた

やさく申よりかきまき高より多勢

を川とせめより手地形有は先仕よ  
り。を法事埋め草を川と堀を一定つ  
法ありよとの議云也

柴田退治記云秀吉自ら馬見敵に傷以  
短兵引拂乱杭逆茂木打破山下即其地結  
返柵重行自把以材木焚之止敵之通路時  
々刻々成仕等或以銃炮火矢投相明焼破  
屋宅或以柳緋玄羽鶴背空山崩森築地

清正記云去月六日書状十三日如加  
以被見仍小田系し城跡又丈仕奇寫  
信付れ依り城中続き夜日及能堪欠落  
軍雖者も於其場如加成敗  
天正記云秀長軍秀次を大將と  
志るに押よせ當日三時いさふ及ふ次  
の目志よりをり外城を打破り  
せりり水の攻をふし五日乃留水の  
を而城中これをいり既りゆふれ  
す  
如原自体自録言山中の城を如田兵系大  
丈為加勢小系を内門大丈間宮豊前朝倉  
能登籠彼城翌廿九日令秀次以仕寄東西  
分目の合戦不可者率尔傷之

寄口

愚耳旧聴記云  
大光寺初  
天正二年八月十

三日大光寺乃能本橋磨は追得たり成と  
て馬を少かせ終ふ若新屋尾崎波岡に  
り後詰乃勢出とやせんと思ふ押一人敷を  
て先波岡の押へは津瀬石大和木村  
越後之勢を合せ雜兵都合七百余人波岡  
より寄の寄に我堅固よりと仰付切を  
そありあくる強砲を先り進ませ防戦せ  
んと待りきり

又云先波岡乃押は津瀬石大和木村  
越後之勢を合せ雜兵都合七百余人波岡  
より此寄の堅固よりと仰付

繯寄

相隣取詰之越後兵八千斗里侍を堅くし  
くり寄し掛来し一先白尾監物即  
引付鎗を乃

逆寄

太平記云

柳出張天  
王寺条

宇津宮一人武命を合

了大敵子向らん事命を惜んさふあら

さりあれは怒と宿不つも不歸二は羅

了直子七月十九日午の別ふ都をあつ天

王寺くそつりく中畧河内西の位人初

田孫二師此由同く楠のあ来りく云か

くは先日乃合戦り負服をさく京

より宇津宮此向れる日今夜既り柱相

よ著く其勢僅小六七百騎は過くと云へ

れ先小隅田宇橋、五千余騎まく向くゆしをた

小群子僅の小勢まく追散くゆしそあし

其上今度あは方勝ふ業しく大勢也敵を極

を失ふいしく小勢也宇都宮從に武勇の速くふ

りとも行程此事うけか今夜逆奪しそあ

散しく捨れそあを楠智思業しそあ

くは合戦の勝負必しも大勢小勢ふ依ふ

士卒の志しをいふすゝとせしむると也

會津陣物語之京勝、佐大將を以評定せら

れり中出軍を一匹小集ノ會津をはお給白

川表まゝ逆あゝおくお家康と野合の一

我仕勝負を交し軍お勝、家康の跡を追

る上方一切とすゝし

賀越園淨記之富田一揆富田孫六長秀士卒

お向く中々、敵終ひ大勢をぬはとく目前

お置徒らふ時日を送んて世念の次第也今日

某逆事ありて討散らん若一合戦て負ふ

は義お曝らせる戸を九原の苦のつゝ可通とヨ

キモナク中希とは各皆取ら股て感涙を

流し悉く此義を以て回らん

又云堀大坂越前守十一月十九日、國中四ノ洞

し合し、お遠く河合の庄のちの牢

お討まゝ、お遠く一押寄中間筑後の法橋

を徳吉人と八重巻寺小畑河村はあり能後  
法橋則道寄うく遣れへく若林長門守  
島を去考大羽くく僅小八百余騎并花く先  
自如島表う支へ事り

付入

愚来旧聴記云南部無深寄自うつ小葉くあ

とを三うふて遣うけ城乃大自北坂中と追結  
免付入ふと人といさく法く千余人の寄自共乱

と急く又へく事そく

義光物語云義光公法鏡く敵去く出く

そ幸ちと付入り安あさく引返し

相原自休自録云古田兵部と東田より飯く

入相攻の城星然敵出り寄来依く割微勢侍

十余軍交恒率津ノ城南ノ口ヲ持中東ノ

方合部完戸稠く攻入合部経叶引入外

毛利ノ魁兵付入ニ条止上田者く取大カ



武家名目抄稿第十三冊

打内門... 武家名目抄稿第十三冊... 日野由之... 青山景通... 同月三十日再校并書... 同月十二日七日夜以旧校一校了成

明治十五年十一月 日野由之

同年同月三十日再校并書 青山景通

同年十二月七日夜以旧校一校了成



明治十七年二月十二日 校合 青島英保

開元二十六年二月十一日 奉令 青陽閣 吳郡



開元二十六年二月十一日 奉令 青陽閣 吳郡

開元二十六年二月十一日 奉令 青陽閣 吳郡

